

修家民古 物語

— 卷のうを祓^はころこ —

Kazue Kota

庭家作 甲田 和恵

京町家の解体前

ふんや

『あのころ、こんな暮らしがあった 昭和恋々』(山本夏彦/久世光彦 著 文春文庫刊)

この著書に書かれている情景は昭和最後の時に生まれた私たちの目頭を熱くし、胸を懐かしさでしめつけた。

実際に見たわけでも、その時代に、そこにいたわけでもないのに感じる切なさや寂しさ。

この懐かしい郷愁の思いは世代をこえ、地域をこえ、不思議と共有することのできる情操の一つではないだろうか。

『逝きし世の面影』(渡辺京二著 平凡社ライブラリー刊)

明治維新時、ヒューズケン是有能な通訳として、ハリスに形影のごとく付き従った人物である。

江戸で幕府有司(官史)として通商条約をめぐって交渉が続いた1857年12月7日の日記に次のように記した。

「いまや私がいとしさを覚え始め
ている国よ。

この進歩は本当にお前のための
文明なのか。

この国の人々の質朴な習俗と共
にその飾り気のなさを私は賛美す
る。

この国土のゆたかさを見、

いたるところに満ちている子供
たちの嬉しい笑い声を聞き、

そしてどこにも悲惨なものを見
いだす事ができなかった。

私は、

おお、神よ

この幸福な情景が今や終わりを
迎えようとしており、

西洋の人々が彼らに重大な悪徳
を持ち込もうとしているように思
われてならない」

二

ヒューズケンはこの時、一年二ヶ
月の観察期間を経ており、決して
単なる旅行者の安っぽい感傷を
語ったわけではない。

同様に長崎海軍伝習所の教育隊
長カッテンディーケは2年の月日
を長崎ですごしており、次のよう

に記した。

「私は心の中でどうか今一度ここ
に来て、この美しい国をみる幸運
に巡り会いたいものだといひそかに
希った。

しかし同時に私はまた、日本は
これまで実に幸福に恵まれていた
が、今後はどれほど多くの災難に
出遭うかと思えば、恐ろしさに耐
えなかつたゆえに、心も一層に暗
くなつた」

私たちは昭和の時代、平成の時
代に大切な、もつとも大切な何か
を亡くしてしまつたのではないか
と胸騒ぎがした。

それが一体なんなのか、それを
思い出さなくてはならないと、胸
のうちから強く突き上げる何かを
感じるのであった。

三

ご先祖様との共同作業

時間じくしてご縁賜り、導かれ
た古家があった。

そこは京都市の北東に位置する
洛外にあり、庭先に隣接する原野
の梅の大木が迎え入れてくれた。



(上) 野原の奥に梅の大木

(下) 土間のはつり作業 (左) 解体作業壁剥し

今思えば、あの梅の木が心定ま
らぬ私たちに教化を授けるために
導いてくれた御魂ではないかと確
信している。

100年以上も経つ京都の長屋
の改修はまさに自分たちの心身の
穢れを祓うがごとく、木造伝統工
法の躯体に、昭和後期から取つて
つけられた西洋の物質文明の技術
を解体する作業から始まつたので
す。

0・1^{ゼロワン}テストにより解体するべ
き箇所を出し、壊しては、片付け、
壊しては、片付けを延々と続けて
いった。





解体作業で顔中、塵まみれ

自然素材も長年放置しておく
 穢れを吸っているようで、漆喰、
 土壁、竹木舞までもが容赦無く0
 ・1に、捨てるように示される。
 京都の狭い道ゆえに車両が入れ
 ず夫婦二人、手運びの作業で0
 1がプラスと出るまで続けられた。
 解体にかかった期間およそ二ヶ月。
 毎日埃と土をかぶり、汗にまみ
 れ、雨でも自転車で二人通った。
 なんとか無事に解体が終わった
 家は、柱と梁、桁、屋根のみの、すつ

からかんとした。
 解体により、ようやく光が家の
 中に差し込む。
 そこには解体前の重々しい空気
 も、苦しそうなコンクリート土間
 も何もない。
 穢れを祓われ、静かに佇む木の
 柱があり、太陽の陽にあたり、何
 やら語りかけているように感じる。
 家全体からは長年の重荷が解か
 れ、ほっとしているようにすら感
 じられる。



四

地際から天井まで塗られた土壁
 の下地はいつたいつ塗られたの
 だろう。

この時代は村人がみなで協力し、
 助け合って下塗りをやっていたの
 だろうか。

決して職人技とは思えないガタ
 ガタの壁に、当時を生きる人々の
 心と重なった。

折しも、心に強く芽生えた事が
 ある。

「日本民族の、ご先祖様たちの心
 を感じ、心を受け継ぐ家。」

この先、私たちがいなくなった
 後もここに住まう人々の心に日本
 の心がしっかりと受け継がれ、心
 が育まれる家にしよう。
 今を生きる私たちはご先祖様た
 ちから子供達、孫たち、未来へと、
 大切な何かを繋ぐ役割がある。

心で生きるのだ。」

五

有から無へ

「頭がかゆい、見てくれへん……」
 主人の枕にシミがついている。

何日も前から気にはなっていた
 のだが、自身もクタクタで家族の
 健康管理を怠ってしまった。

左側頭部十円玉よりも大きいぞ。
 五百円玉ほどの面積に真っ赤な
 肉が膿をドクドクと出していた。

突然背筋が凍りついた。なんの
 知識も無く不安だけが膨れ上がる。
 キャベツや白菜をかぶせたり、
 思いつく限りのことをしたが症状
 は良くならない。

家の解体と同時期に起こったこ
 の症状は毎日に悪化し一ヶ月以上



頭のかぶれ

も続いた。

家族の健康を守れない自分への怒り、なかなか進まない家の改修、造園の仕事、家事、主人の朝晩の洗髪。

解体と同時に主人に起きた体の信号は、私たちに人生の一つの山場を告げ、二人の心身をかき乱した。

体を治すものはないかと「まほろば」のカタログをかたっぱしから0・1テストし、「アスタジー」にプラス反応が出た。

薬をすすがる想いで早速注文をさせていただき、1日の飲む回数、量を0・1で決め飲み始める。

すると、どうであろうか。二日

目にして、膿の量と色に変化があった。三日目に、ピンク色の薄膜がはった。あんなにも滴っていた膿がみるみるなくなっていくではないか。赤ちゃんのような、薄皮。

飲み始めから二週間が経ちアスタジーも無くなった。その後はアスタジーは必要なし！ 自然に任せてよし！ と0・1が示した。

この時の生活が今の私たちに繋がる。

朝起きてすぐに症状を見ながらアスタジー何粒飲むか0・1、改修中、問題が起きるたび0・1、一日作業して帰りのスーパーで食材を0・1、入ってきた造園の仕事のコンセプト、植える樹種や土壌の0・1、自宅改修における工法や材料の選定を0・1、0・1、0・1、0・1……！！！！

色々なことが常に同時進行で状況も常に変化してゆく。思考はごちゃごちゃ！ 周りに0・1テストを見られても、どう思われているかなんて気にする余裕もない！

こうして0・1テストによる生活が自然と定着していった。

二ヶ月近くの闘病に明るい兆しが見え、ようやく緊張の糸が解けた。季節が一つ変わり、長い長い解体作業に終わりが見え始めた頃でもあった。

二人とも涙が止まらなかった。

六

大工さんも解体完了の知らせを聞き、いよいよ建築開始！

解体後の家には日光が入り、清らかな風がスーと抜けてゆく。

長年溜まっていた穢れ、余計なものがなくなくなった家は息を吹き返したかのように力強く呼吸をしていた。

奇しくも時同じくして起きた、体の変化と家の大解体。

あれは次なる段階へ行くための大浄化であつたのだろうか。

頭皮のただれも首のかゆみも無くなった清々しい主人の表情と、スカスカの躯体だけとなった素顔のこの家が重なって見えた。



解体後の室内

その時、私たちはこれが自分たちの大改修であることによく気が付いた。

生まれてから、今までにためてきた腐った性根、固定概念、穢れた肉体をこの家は祓うように促してくれたのではないか。

そうか！ そうだったのか！

清らかな曇りなき心でしか、何も見えてこない。

この無の心こそ良いエネルギーを呼び込む、日本民族が大切にしてきた清めの心なのか。

ようやく有が無となった家と私たち。

“0”^{ゼロ}これからが始まりなのだ！

つづく